

神々の巔が見える。

厚く覆われた雲の隙間から見える稜線からでも、その峻厳さをもって人々の畏怖と尊敬を集めてきた威厳を垣間見ることが出来る。

その山麓にある村、デーダシス。

東を仰ぎ見れば、神々が棲むとされるガルベール山脈。

西を見下ろせば、ラムシユタインの王都、ソルバークス。

東方よりラムシユタインへと入るルートが、先々代の王マーティス三世の手により整備され、デーダシスの村からやや南方へと移ってからは、この山麓の村にあったかつての面影もない。人が寄り付かなくなつて既に十年余り。

村の者達も早々に枯れた土地に見切りをつけ、多くの者は整備されたルート沿いにある近隣の村へと移つていった。

今となつてはただ、まばらに茂る高山植物が物憂げに葉をゆらすだけとなつてしまつている。灰色に立ちこめた雲が流れる。

湿り気を帯びた風が渦を巻き、地表の高山植物を巻き上げたかと思うと、次の瞬間には谷間に向けて駆け下りる。

山間の風の独特な動きに煽られ、まるで霧雨のように立ちこめていた雲が一瞬にして晴れる。旧街道に影が揺らめいた。

足早に歩くその姿がすぐさま、再び風に煽られた雲によつてかき消される。

しかし、その確かな足取りは衰えず、男は真つ直ぐデーダシスへと向かつていた。

男は村に入ると一件の廃屋へと向かつた。

村の廃屋の中でも割と裕福だつたことを伺わせる大きな屋敷だつた。

赤錆の浮いた扉をくぐり抜け、男は屋敷の庭へと足を踏み入れる。

じゆうぶんな広さを持つた庭だつた。

商人の屋敷だつたのだから。あまり西側には見られない様式の意匠を懲らした鉢や置物が庭に点在している。

かなりの広さを持つた花壇の跡らしきものもあつたが、もはや手入れをする者など誰もおらず、晩春の山草が好き勝手に花を咲かせていた。

そういった屋敷の様子などまるで目に入らないように男は庭を突つ切つて玄関まで辿り着く。鍵など掛かつているわけもない。

男は玄関の扉を開くと中に足を踏み入れた。

ややごごんまりとしたホールを抜け、二階へと伸びる階段を上る。

男はホールを見下ろすテラス状の廊下を左に折れ、突き当たりの部屋の扉を開けた。部屋の中は外の霧のせい、薄暗い。

その奥付きにかつては遠方からの客をもてなしたと思われるベッドがあつた。

ベッドには豊かなブロンドの髪をした女が眠つていた。

女は男の気配に気づき、目を開けて身を起こした。

男の存在に気づき、女は慌てて寝乱れた服装を整える。

「おかえりなさい」

トリア・キリムは微かに笑みを浮かべながら、男に向かつてそう言った。

トレアがこの屋敷に連れられて来て、もうすぐ一週間が経とうとしていた。

なぜ男が人の住まなくなつた廃村に滞在し、何をしているのか、トレアには全く分らない。

男は定期的に村からふらりと出て行くと、どこからか食料を調達して帰つて来る。それ以外は特にこれといって何をしているという風でもなく、かといって何かを待っているという風でもない。時折、嚴重に鍵のかけられた部屋に籠もり、数時間出てこないことがある程度だった。

男は名前をバルド・オーウエンスと名乗つた。しかし、バルドはその他の事を一切教えてくれない。なぜ自分がさらわれて、この廃村に居るのかも。理由の一切は固く閉ざされたバルドの口から引き出すことはできなかった。

逃げるか？トレアはもちろんそれも考えた。しかし、常にどこからか監視されている感覚が拭えず、まだ試してはいない。剣もなく、何よりもさらわれた時に目にしたバルドの異様な技あれが果たして技と呼べるものなのかどうかははなはだ疑問だったが、目をにした今となつては、脱出を試みるリスクはかなりの高さを想像させた。

しかし、トレアの今の心境からすれば、ここから逃げ出さない理由は純粹に危険性を考慮してというわけでもなかった。自分がなぜさらわれたのかも知りたかつたし、バルドが何者であるのかも知りたかつた。端的に言えば、バルドに興味を持つたと言ひ換えてもいいだろう。

トレア自身の興味のためにも、逃げ出すという意識は彼女の中から消えていた。それは、自分をさらつた相手の側に身を置くという行為であり、愚かな行動だということもトレアには分かつていた。しかし、とトレアは考える。

バルドは、トレアをさらつては来たものの、明らかに困っているようにも見える。連れ去られた時点は力づくで押さえ込まれたが、バルドはそれ以来、トレアに対して一切の暴力を振るっていない。性的な暴力や要求はもちろん、何の要望も願望もないようだった。むしろ、バルドがトレアとの距離をわざと置いているとも思える行動を取っていた。

かと言つて、人質としての価値はどうかと問われると首を傾げざるを得ない。トレアは王族や貴族といった人種とは無縁の人生を歩んできた。身代金を要求されようにも、払つてくれそうなたはガスト傭兵団だけだ。親類や血縁者は全て交易路を行き来して日銭を稼ぐ貧乏芸人だった。今でもどこを旅しているか分からないような状況では身代金も要求しようがない。

ではなぜこの男と廃村で一緒に暮らす羽目になつたのかと自らに聞いてみる。恐らくはさらわれた時につぶやいていた名前 マーデルとかいう女の名前だった筈だ。関係している筈だ。マーデル……一体誰のことなのだろう？

トレアはここに連れて来られて幾度となく浮かんでいく疑問を反芻してみた。しかし、連れ去られた時にバルドが浮かべていた表情を思い出す度に、その疑問を飲み込んだ。あの表情。深い哀しみと喜びと憎悪の入り交じつた狂気を帯びた視線。人違をされているようだったが、トレアは容易に踏み込めない雰囲気を感じ取っていた。

そして、あの蜘蛛のようなかぎ爪。トレアも芸人である親族や、傭兵団と共に、東西の国々を数多く回ってきたが、あのような術は今まで見たことがなかった。

奇怪な術、狂気を帯びた視線、そして何も話そうとしない男。それらの全てがトレアにとって危険な男であることを示唆している。トレアはそう感じながらも、自分の身の危険がさほど差し迫つた状況にあるとは感ずることができなかった。

何も分からないまま、何もされないまま、トレアはただバルドと廃屋に同居しているという奇妙な状況だった。

気がつくのと既に陽は西に傾きかけている。トレアは腰掛けていたベッドから立ち上がり、窓辺に立った。

団長達は心配してるんだろつな……

トレアはぼんやりと曇つた空を見上げながらそう思った。

音もなく、部屋の扉が開く。

トレアは扉が開いてからはじめて気配を感じ取り、扉を開けたまま中に入ろうとしないバルドを振り返る。

傭兵として戦いの中に身を投じる身として、気配に人一倍敏感であることを誇りに思っているトレアの自負が揺らぐ。いつもそうだ。この男は現れてようやくその気配を感じ取ることができる。密偵としてかなり訓練されていたのだらうと思う。気配の殺し方を心得ている。

「どうしたの？」

トレアはできるだけ優しく問いかける。問いかけながら、自分を捉えていた狂気を帯びた視線を思い出す。

だからこそ・・・刺激しないよう可能な限りさりげなく会話しなくては・・・

「いや、何でもない」

バルドはそうつぶやいて目を逸らした。

私の中の何かを恐れている。そうとしか思えない。

「今日の夕食は何かいいと思う？」

トレアは再び窓の外へと視線を移す。

この廃屋に連れて来られてからすぐに、トレアはバルドの様子をうかがいながら食事を作ることを申し出た。バルドは特別反対するわけでもなく、その提案はあっさりと受け入れられた。

トレアが毒薬の類を食事に入れ込むことを考えていないかのようだった。それとも、訓練の中で身につけた毒薬に対する抵抗力もあるのか。

「今日はいい」

トレアはその言葉に驚き、バルドを振り返った。ここ一週間ではじめて聞く返事だった。

「知らない？」

用心深く聞く。何か情報を得られるかもしれないという期待があった。

「今日は出かける」

バルドは相変わらずトレアと視線を合わせないようにして、部屋の片隅を眺めていた。

「どこへ？」

そう聞かれて、自然にバルドの視線がトレアの顔を捉えた。

「それは・・・」

バルドの表情が苦悶に歪む。

「言えな・・・」

歯を食いしばりながら、絞り出すかのようにようやくその一言を言ったバルドはトレアから視線を引きはがした。

「そう・・・」

駄目だったか・・・

目を伏せる。

なぜあんなに苦しそうな・・・

「マーデ・・・」

バルドの言葉にトレアは視線を上げる。バルドは蒼白になりながらトレアを凝視していた。両の拳を握りしめ、全身に力を込めて必死で何かに抗うかのように。

「おまえ・・・お前は・・・マーデル・・・マーデルじゃない・・・」

まるで感情を押し殺すかのように、呪文のように、必死で自分に言い聞かせている言葉。その言葉がゆるゆると虚ろにバルドの口から漏れる。

この人は・・・分かっていて・・・目の前にいる私が別人だつてことに・・・

トレアは言葉を失って立ち竦むしかなかった。

バルドは低くつぶやきながら廊下の薄闇へと姿を消していった。